

(財)21世紀ヒューマンケア研究機構

21世紀ヒューマンケア研究機構 研究年報 第10巻（2004年度）抜刷

自己の死観と大切な他者の死観

－死観モデルの検証－

河 野 由 美

自己の死観と大切な他者の死観

—死観モデルの検証—

河 野 由 美

キーワード：自己の死観、大切な他者の死観、死観モデル

Key Words: death perspectives on self, death perspectives on significant other, death perspectives model

I. はじめに

これまで死観及び死の不安・恐怖など死への態度に関しては、人格特性や年齢・性・教育などのデモグラフィック要因との関係 (Kastenbaum, 1992)^[1]、来世信仰との関係 (Thorson & Powel, 1988)^[2]、宗教との関係 (Batson, 1976)^[3]、心理社会的成熟との関係 (Rasmussen & Brems, 1996)^[4] などから、欧米を中心に非常に多くの研究がなされてきた。日本においても、死生観、生死観、死観といった主題で、死に関する様々な意味づけや態度に関する多くの研究の蓄積がある。しかし渡部 (1998)^[5] や金児・渡部 (2003)^[6] の研究を除いては、死観に関しては、自己の死についての死観 (一人称の死) なのか、あるいは他者といっても近い他者の死 (二人称の死) なのか、それとも、漠然とした見知らぬ他者に対する死 (三人称) に関する観念なのか、明らかにされてこなかった。だが、一人称の死か、二人称の死か、それとも三人称の死なのかによって、死の様相は異なったものになると推察される。事実、金児・渡部 (2003) の研究においては、「一般に自己の死は否定的になるのに対して、近い他者の死については、それは恐怖であるが、死によってすべてが消滅するわけではなく、魂は存続すると受け止められており、男子よりも女子の傾向が強い」(P. 97) ことを明らかにしている。本調査では、死観に関して、自分の死

に関する観念 (以降、自己の死観と称す) と、家族の中で最も大切な人の死に関する観念 (以降、他者の死観と称す) を測定し、自己の死観と大切な他者の死観の違いを検討した。

また、加齢と死の不安 (恐怖) についての研究はこれまで数多くなされているが、加齢と死への態度に関する研究結果は一致していない。例えば、成人期以降は加齢に伴い、死の不安は直線的に低下する (Neimeyer et al., 1988^[7], Thorson & Powell, 2000^[8]) という結果を示すものもあれば、死の不安は中年期にピークに達するという加齢と死の不安の曲線的結果を示す (Gesser, Wong, & Reker, 1987^[9]) ものである。こうした加齢と死への態度に関する先行研究の多くは縦断的研究法を用いず、サンプルに偏りがあるなど方法論的な問題を含んでいる場合がある。本研究では横断的研究法を用いているが、無作為抽出により同一文化内の幅広い年齢層からデータを収集し、サンプルの歪みが少ないデータを用い、年齢による死観の違いを検討した。

また、死生観、生死観、死観という用語に関しては、厳密な概念規定や区別がなされず、それらは混同して用いられていることが多い。だが死生観、生死観、死観の違いを簡単に言うならば、死生観ないしは生死観という概念が用いられる場合は生死一如という言葉があるように、生と死の観念・態度は密接に関連しているとの考えから、生と死の観念を相互に独立させ

るのではなく、生と死の観念・態度を表裏一体のものとしてとらえており、言うまでもなく死だけでなく生に対する観念をも包含している。そして生死観といった場合には仏教的な意味合いが含まれていることが多い。一方、死に関する観念に焦点を当てた場合には死観という概念が用いられており、心理学的研究に先鞭をつけたのはスピルカたち (Spilka et al., 1977)^[10] のグループであるとされている。彼らは1977年にDeath perspective scale (死観尺度) を開発し、それは「苦しみと孤独」「浄福な来世」「無関心」「未知」「家族との別離」「勇気」「挫折」「自然な終焉」の8の下位尺度から構成されている。本調査では、このスピルカからの死観尺度と渡部 (1998) の死観尺度を参考にして、自己の死観と他者の死観を測定するための新たな尺度を作成した。なお、本研究では死観とは死に関する様々な意味づけや態度であると操作的に定義しておく。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

自治体の選挙人名簿を基にH県内在住の30歳～69歳の男女2,500人を無作為抽出し、郵送法にて実施した。

2. 調査時期

2003年7月～8月

3. 使用尺度

(1) 自己の死観

自己の死観に関してはスピルカたち (1977) のDeath perspective scale (死観尺度) と渡部 (1998) の死観尺度を参考にし、14の質問項目からなる死観尺度を新たに作成した。

(2) 他者の死観

自己の死観尺度の「私 (自分)」の表記を「その人」(家族の中で最も大切な人について

回答するように、アンケートの最初に教示分を添えている) に変えた14の質問項目を、他者の死観尺度とした。

Ⅲ. 結果

1. 回収率

有効回答票数は397票で、回収率は高いと言えず15.9%となった。回収率の低さに関しては、様々な要因が関係していると思われるが、一つの理由として考えられるのが、人々の死に対する嫌悪感、忌避感である。回答者の中には、アンケート最後の自由記述の箇所に「死に関することばかりの質問で、縁起の悪いアンケートだ」等の記述が見られた。こうした死に対する忌避の態度が、回収率にも少なからず影響していると思われる。

2. 性別と年齢の構成

対象者の年齢と性別では、平均年齢53.7歳 (SD=10.1)、性別の構成割合は男性34.9%で女性65.1%となり、女性の占める割合が多くなっている。

3. 自己の死観

因子数の決定に関しては固有値が1以上で、固有値の低減が大きくなる一歩前という基準を採択し、主成分分析 (バリマックス回転) を実施した。その結果、4つの因子が抽出された (表1)。

第1因子は、「死んだら私は消えてなくなる」「死んだら私は、灰あるいは土になるだけだ」の項目が高い負の負荷量を示し、「私は死んでも「自然」(生命、宇宙) に還り、かたちを変えて存在しつづける」など死後の存在や不滅に関する項目が高い正の負荷量を示しているため、第1因子を「不滅」因子と命名した。

第2因子は、「私にとって、自分の死は最大の恐怖である」「私にとって、自分の死は、もっと

もつらいものである」の項目が高い正の負荷量を示しているため、「恐怖」因子と命名した。

第3因子は、「死は生命の自然な姿である」「死は私がどう生きたかの集大成である」の項目が高い正の負荷量を示していることから「自然の終焉」因子と命名した。

第4因子は「死について真剣に考えることはあまりない」「自分の死が想像できない」などと言った、死について考えることから逃避している項目が高い正の負荷量を示していることから、「逃避」因子と命名した。

なお抽出された上記の因子は、これまで日本人を対象にした死観の先行研究で抽出されている因子と類似したものとなっている（河野2000^[11]、河野2001^[12]）。そして、「不滅」と「自然の終焉」因子は、死に対して積極的ないし肯定的意味づけをしている因子であるため肯

定的死観とし、それ以外の「恐怖」「逃避」因子は死に対して否定・拒否といった否定的な意味づけをしているため否定的死観として以後の分析では扱う。

4. 他者の死観

他者の死観尺度に関しても、自己の死観尺度と同様の手法を用いて主成分分析（バリマックス回転）を実施した（表2）。その結果、自己の死観と全く同一の因子が抽出され、因子に高い負荷を示す項目もすべて同じであり、他者の死観と自己の死観の因子構造は同じであることが明らかとなった。

なお、家族の中で最も大切な人として選択された割合が多かったのは、「配偶者」（67.1％）で、次いで「子ども」（24.4％）、「自分の父母」（6.4％）であった。調査対象者の中で、92.4％

表1 自己の死観の主成分分析表（バリマックス回転） N=397

	I	II	III	IV
<第1因子：不滅 $\alpha = .836$ >				
死んだら私は消えてなくなる	-.792	.063	.179	.031
死んだら私は、灰あるいは土になるだけだ	-.779	-.069	.226	.089
私は死んでも「自然」（生命、宇宙）に還り、かたちを変えて存在しつづける	.738	.023	.264	.000
私は、死んでも生まれ変わることができる	.721	.017	.174	.083
私の魂や靈魂は不滅である	.689	.190	.305	-.034
死んでしまえば、私は忘れ去られてしまう	-.596	.000	.260	.140
私は死んでも極楽(天国)へ行き、幸せに暮らすことができる	.547	-.060	.236	.215
<第2因子：恐怖 $\alpha = .813$ >				
私にとって、自分の死は最大の恐怖である	.017	.899	-.056	.089
私にとって、自分の死は、もっともつらいものである	.032	.883	.075	.155
<第3因子：自然の終焉 $\alpha = .367$ >				
私の死は生命の自然な姿である	-.113	-.111	.759	.024
死は私がどう生きたかの集大成である	.201	.126	.655	.003
<第4因子：逃避 $\alpha = .542$ >				
自分の死について真剣に考えることはあまりない	-.032	-.101	-.225	.753
私は自分の死が想像できない	-.023	.224	.085	.724
私は自分の死が予測できない	.049	.267	.338	.595
初期の固有値	3.56	2.22	1.46	1.19
分散の %	24.89	12.84	11.33	11.14
累積 %	24.89	37.73	49.05	60.20

表2 他者の死観の主成分分析表（バリマックス回転）

N=397

	I	II	III	IV
<第1因子：不滅 $\alpha = .790$ >				
その人は死んでも「自然」（生命、宇宙）に還り、かたちを変えて存在しつづける	.761	.045	-.122	.218
死んだらその人は消えてなくなる	-.721	.179	-.057	.094
死んだらその人は、灰あるいは土になるだけだ	-.688	-.167	.095	.164
その人の魂や霊魂は不滅である	.676	.094	.080	-.046
その人は、死んでも生まれ変わることができる	.645	-.123	.107	.186
その人は死んでも極楽(天国)へ行き、幸せに暮らすことができる	.532	.042	.280	.124
死んでしまえば、その人は忘れ去られてしまう	-.503	-.407	.383	.128
<第2因子：恐怖 $\alpha = .607$ >				
私にとって、その人の死は最もつらいものである	-.023	.799	.075	.127
私にとって、その人の死は最大の恐怖である	-.035	.727	.297	-.101
<第3因子：逃避 $\alpha = .530$ >				
その人の死について真剣に考えることはあまりない	-.038	.002	.732	-.236
私はその人の死が予測できない	.091	.200	.590	.144
私はその人の死が想像できない	.157	.429	.566	-.099
<第4因子：自然の終焉 $\alpha = .395$ >				
その人の死は生命の自然な姿である	-.092	-.162	-.002	.768
死はその人がどう生きたかの集大成である	.174	.191	-.095	.723
初期の固有値	3.15	2.06	1.35	1.16
分散の %	21.82	12.19	11.27	9.84
累積 %	21.82	34.01	45.28	55.12

の人が結婚しており、子どもがいる人が88.7%であることから、子どもよりも配偶者の方が最も大切な人として選択される割合が高いことが窺える。従って、本研究で測定している大切な他者の死観においては、67.1%の人が配偶者の死に関して回答していることになる。

5. 自己と他者の死観尺度得点

自己と他者それぞれの死観の因子分析で高い負荷量を示した項目の評定値を加算し、項目数で除した値を、自己と他者の死観尺度得点とした。自己と他者の死観はそれぞれリッカート法の4件法で実施しているため、尺度の中位点（そう思うとも、そう思わないとも、どちらでもない点）は2.5点になる。では、自己の死観と他者の死観ではどのように異なるのかを明らかにするために、自己の死観尺度得点の平均値と

他者の死観尺度得点の平均値を比較した（図1）。その結果、「不滅」「恐怖」「逃避」「自然の終焉」尺度の全てに有意な違いが認められた。中でも他者の死観の「恐怖」尺度得点は $M=3.5$ と非常に高く、自分が死ぬことよりも、大切な他者の死に対する恐怖の方が非常に強いことがわかる。そして大切な他者の死を考えると「逃避」（ $M=2.9$ ）している。また一方で、「不滅」尺度得点に関しては他者の死観尺

図1 自己と他者の死観尺度得点

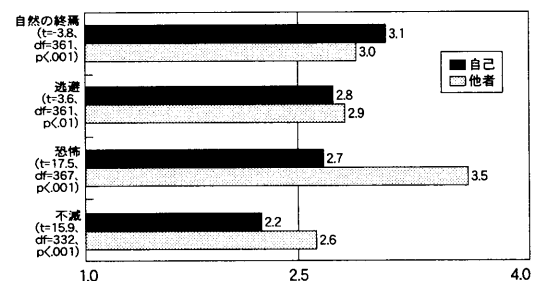
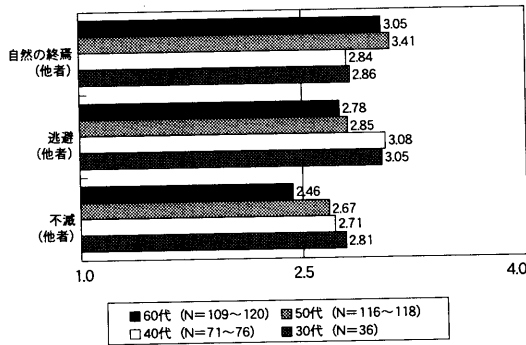


図2 年齢段階による他者の死観尺度得点



度得点 (M=2.6) の方が自己の死観尺度得点 (M=2.2) よりも高く、中位点を超えており、自分は死んだら消滅するが、大切な他者が死んでも消滅しないという死観を有していることがわかる。

6. 年齢段階による死観の違い

対象者の年齢を30代、40代、50代、60代の4つの群に分け (以下、年齢段階と称す)、年齢段階によって自己や他者の死観が異なるのかを明らかにするために、自己と他者の死観尺度得点を従属変数とし、年齢段階を独立変数とした分散分析を実施した。

その結果、興味深いことに他者の死観においては「恐怖」尺度以外は年齢段階により違いが認められたが (不滅: $F[3/328]=4.08, p<.007$ 、恐怖: $F[3/347]=2.19, ns.$ 、逃避: $F[3/346]=3.93, p<.009$ 、自然の終焉: $F[3/343]=3.23, p<.02$)、自己の死観においてはどの尺度においても年齢段階により違いはみとめられなかった (不滅: $F[3/335]=1.21, ns.$ 、恐怖: $F[3/359]=0.34, ns.$ 、自然の終焉: $F[3/359]=2.12, ns.$ 、逃避: $F[3/357]=0.35, ns.$)。

年齢段階による違いが認められた他者の死観尺度得点を図示したものが図2である。これを見ると興味深いことに「自然の終焉」と「逃避」に関しては、年齢が50歳以上の者 (50代と60代) は50歳未満の者 (30代と40代) よりも、相対的

に大切な他者の死を「自然の終焉」とみなし、大切な他者の死を考えることから「逃避」していない。そして年齢が若い人ほど大切な他者は死んでも「不滅」であるという死観を有している。

7. 性別による死観の違い

性別によって自己や他者の死観が異なるのかを明らかにするために、性別を独立変数とした、自己と他者の死観尺度得点の平均値の差の検定を実施した。その結果、他者の死観では「不滅」「恐怖」「逃避」尺度に有意な差が認められ (不滅: $t=-3.15, df=332, p<.002$ 、恐怖: $t=-1.94, df=351, p<.05$ 、逃避: $t=-3.21, df=350, p<.001$ 、自然の終焉: $t=1.52, df=347, ns.$)、自己の死観では「不滅」尺度のみに有意な差が認められた (不滅: $t=-3.48, df=340, p<.001$ 、恐怖: $t=-1.09, df=364, ns.$ 、逃避: $t=-0.15, df=362, ns.$ 、自然の終焉: $t=1.24, df=364, ns.$)。

性別により差があった死観尺度得点を図示したのが図3である。女性は男性よりも自己と他者ともに、死んでも「不滅」であるとみなす傾向が強いことが明らかとなった。そして女性は男性よりも大切な他者の死に対する恐怖が強く、大切な他者の死から逃避していることが明らかとなった。

8. 神仏を信じる程度による死観の違い

つぎに神仏を信じる程度により死観がどのよ

図3 性別による死観尺度得点の違い

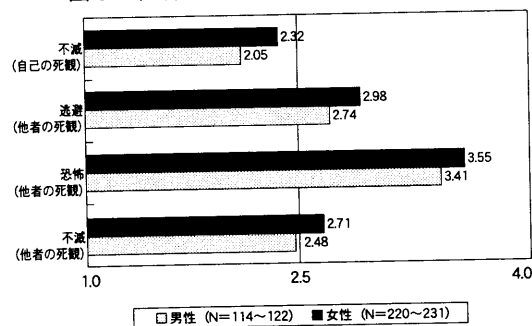
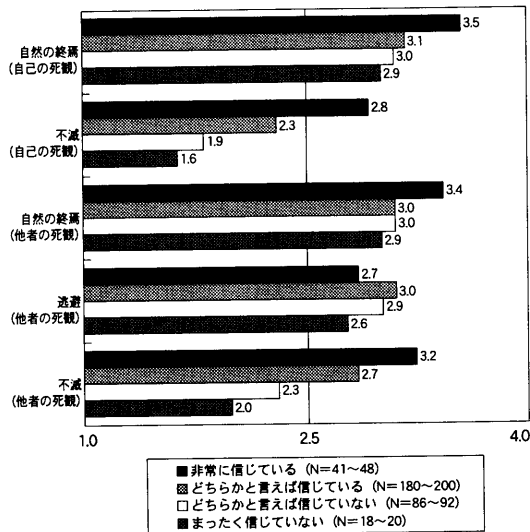


図4 神仏を信じる程度による死観尺度得点の違い



うに異なるのかを明らかにするために、神仏を信じる程度（「非常に信じている」から「まったく信じていない」までの4件法で回答を求めた）を独立変数とし、死観尺度得点を従属変数とした分散分析を実施した。その結果、他者の死観に関しては「恐怖」尺度得点以外は、神仏を信じる程度により違いが認められ（不滅：

$F[3/323]=28.47, p<.001$ 、恐怖： $F[3/342]=2.13, ns.$ 、逃避： $F[3/341]=4.98, p<.002$ 、自然の終焉： $F[3/338]=5.05, p<.002$ ）、自己の死観においては「不滅」と「自然の終焉」尺度得点に違いが認められた（不滅： $F[3/332]=24.72, p<.001$ 、恐怖： $F[3/355]=2.16, ns.$ 、自然の終焉： $F[3/355]=6.36, p<.001$ 、逃避： $F[3/353]=2.52, ns.$ ）。神仏を信じる程度により違いのあった死観尺度得点を図示したのが図4である。

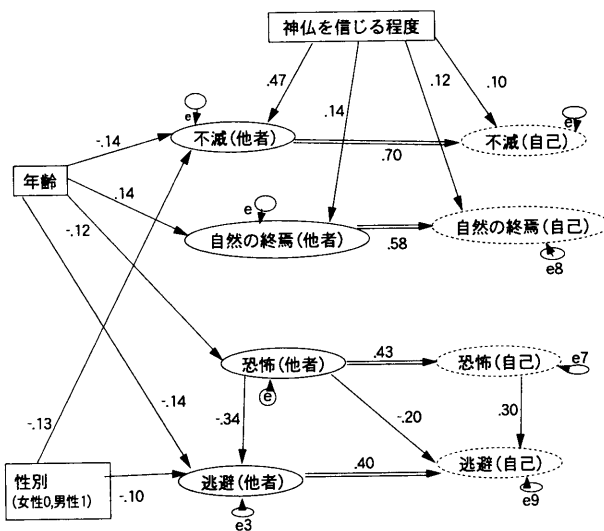
神仏を非常に信じている者は、それ以外の者よりも自分や大切な他者の死を「自然の終焉」ととらえ、死んでも「不滅」であると見なしている。「自然の終焉」と「不滅」は最初に指摘したように、死に対して積極的・肯定的なとらえ方を

している肯定的な死観であるが、神仏を非常に信じている者は神仏を信じていない者よりも、自分の死に対しても大切な他者の死に対しても肯定的な死観を有していることが明らかとなった。

9. 自己と他者の死観モデルの検証

上記の分散分析の結果から、年齢や性別といった要因は他者の死観には影響しているものの、自己の死観への影響は他者の死観に比較して少ないことが明らかとなった。では自己の死観に影響する要因は何であろうか。発達心理学におけるこれまでの研究から、一般的に人は、自己の死に関することよりかなり早期に、他者の死に関する観念が形成されることが明らかにされている（Kastenbaum, 1992）。人は周囲の人や動物の死を通して、死とは何かを考えるようになり、まずは他者の死に対する観念が形成され、その後に自分の死に対する観念が形成される。そうした意味からすれば他者の死に関す

図5 自己と他者の死観モデルの共分散構造分析
RMSEA=.050 CFI=.953



注) 図中の数字は有意な標準化係数を示している。
○は他者の死観、○は自己の死観を示している。
二本線の矢印は他者の死観から自己の死観への標準化係数(β)を示している。

る観念が自己の死に対する観念に影響すると推察される。そこで本研究では他者の死観が自己の死観に影響するというモデルを設定し、そのモデルの適合度を共分散構造分析にて検討した。

まず「性別」「年齢」「神仏を信じる程度」の変数から、全ての自己と他者の死観尺度へパスを引き、あわせて全ての他者の死観尺度から自己の死観尺度へのパスを設定したものを初期モデルとした。その後、有意（両側5%水準）ではない標準化係数を示すパスを削除してゆく手順を踏み、最終的に有意な標準化係数を示すパスのみとなったものを最終モデルとした。その結果、最終モデルの適合度を示すRMSEAは.05、CFIは.95となり、非常に当てはまりの良いモデルであることが明らかとなった。そして、他者の死観から自己の死観において、同一の因子名の尺度は非常に高い β 値（ $\beta = .40 \sim .70$ ）を示しており（図5と表3参照）、自分の死についての観念は大切な他者の死に関する観念から形成されるというモデルの有効性が検証さ

れた。また、神仏を強く信じる者ほど、肯定的死観である「不滅」「自然の終焉」に対して、高い正の β 値を示しており、神仏を強く信じる者ほど肯定的な死観を形成することが共分散構造分析の結果からも明らかとなった。

年齢要因はどの自己の死観尺度に対しても有意な回帰を示さず、他者の死観尺度に有意な回帰を示していた。従って、自己の死観に関して年齢は直接的な影響を及ぼすのではなく、加齢により他者の死観が変化し、その変化した他者の死観が自己の死観に影響することが明らかとなった。

IV. 考察

本研究の結果から神仏を強く信じる者ほど、肯定的な死観を形成することが明らかとなり、世俗化や近代合理主義が浸透している現代においても、死への態度に関しては宗教要因が大きな影響を及ぼしていることが明らかとなった。

分散分析の結果から、50歳以上の者は、50歳

表3 死観モデル（最終）のパス値

			非標準化係数	有意確率	β
不滅（他者）	<--	性別	-.169	.007	-.125
逃避（他者）	<--	性別	-.147	.032	-.105
恐怖（他者）	<--	年齢	-.007	.029	-.115
不滅（他者）	<--	年齢	-.009	.002	-.143
逃避（他者）	<--	年齢	-.009	.006	-.135
自然の終焉（他者）	<--	年齢	.010	.006	.144
自然の終焉（他者）	<--	神仏を信じる程度	.132	.009	.137
不滅（他者）	<--	神仏を信じる程度	.402	.000	.467
自然の終焉（自己）	<--	神仏を信じる程度	.102	.005	.119
不滅（自己）	<--	神仏を信じる程度	.085	.022	.095
恐怖（自己）	<--	恐怖（他者）	.587	.000	.425
不滅（自己）	<--	不滅（他者）	.727	.000	.700
逃避（自己）	<--	逃避（他者）	.387	.000	.401
自然の終焉（自己）	<--	自然の終焉（他者）	.555	.000	.580
逃避（自己）	<--	恐怖（他者）	-.205	.000	-.202
逃避（自己）	<--	恐怖（自己）	.220	.000	.299
逃避（他者）	<--	恐怖（他者）	.354	.000	.337

未満の者よりも、大切な他者の死を「自然の終焉」とみなすことが明らかになった。金児 (1997) ^[13] は数多くの日本人の宗教性に関する研究の蓄積から、およそ50歳が宗教意識の分岐点であることを指摘している。そうした宗教意識の変化が50歳以上の者が、50歳未満のものよりも死を自然の終焉とみなすことに関係しているのかもしれない。

高齢者の死の不安に関する多数の先行研究を分析したFortnerら (2000) ^[14] は、総体的に年齢や性別は高齢者の死の不安の指標にはなりにくいことを指摘している。本研究は横断的研究法を用いており、縦断的研究法を用いていないため、あくまでも断定的な言及はできないが、自己の死観に関しては年齢 (加齢) 要因のみでの影響は少なく、暦年齢それ自体が自分の死に関する観念を予測できるものではなく、加齢による宗教意識の変化や、大切な他者の死に対する観念の変化が、自分自身の死に対する観念を予測する上では重要であると言えよう。いわば人は年齢を重ねるだけで自分の死に対する観念が肯定的に変化するというよりも、大切な他者の死に肯定的・積極的意味を見出すようになること、信仰心を有するようになることにより、自身の死に関する観念も肯定的になると言えよう。

なお本調査において、家族の中で最も大切な人に「配偶者」(67.1%) が多く選択されており、「子ども」(24.4%) よりも選択割合は高かった。そして自己と他者の死観の比較から、人は自分が死んだら消滅すると思っているが、大切な他者は死んでも消滅しないという死観を有している一方で、自分が死ぬことよりも大切な他者が死ぬことの方が恐怖は強く、大切な他者の死について考えることから逃避していることが明らかとなった。従って、現代の家族において「配偶者」は最も大切な人であり、配偶者が死ぬことに関しては自分が死ぬことよりも恐怖が強く、配偶者の死について考えることを避ける

ことが推察された。

最後に、自己と他者の死観の比較に関する研究に先鞭をつけたのは渡部 (1998) であり、精緻な尺度の開発が行われている。しかし彼等 (金児・渡部, 2003) の尺度においては、64項目と尺度項目数が多く、自己の死観と他者の死観の因子構造が完全には一致しないなど、自己と他者の死観を比較する上での制約があると思われる。本研究ではあらたな尺度を開発した。本研究で開発した自己の死観と大切な他者の死観尺度においては因子構造が完全に一致し、自分の死と他者の死に関する観念の比較を行うには有効であることが示された。だが本尺度においては項目数が少ないことも影響しているが、「自然の終焉」や「逃避」尺度においてはクロンバックの α 係数は低く、十分満足のゆく信頼性係数が得られなかった。今後の研究課題としては、より尺度の信頼性を高めるためにも、あらたな付加項目の検討など更なる尺度の改良が必要であると言えよう。

VI. 結論

- 人は自分が死んだら消滅すると思っているが、大切な他者は死んでも消滅しないという死観を有している一方で、自分が死ぬことよりも大切な他者が死ぬことの方が恐怖は強く、大切な他者の死について考えることから逃避している。
- 神仏を非常に信じている人は、それ以外の人よりも肯定的な死観を有している。
- 肯定的死観では、年齢や性別要因よりも神仏を信じる程度要因の方が影響力は強い。
- 年齢は他者の死観には直接的に影響を及ぼすが、自己の死観には直接的には影響しない。
- 他者の死観は自己の死観に強い影響を及ぼし ($\beta = .40 \sim .70$)、他者の死観が自己の死観を規定する死観モデルの有効性が証明された (RMSEA = .05, CFI = .95)。

【引用文献】

- [1] Kastenbaum, R., *The Psychology of Death*: Second Edition, NY: Springer Publishing Company, 1992.
- [2] Thorson, J. A., & Powel, F. C., "Elements of death anxiety and meanings of death", *Journal of Clinical Psychology*, 44, 691-701, 1988.
- [3] Batson, C. D., "Religion as Prosocial: Agent or Double Agent", *Journal for the Scientific Study of Religion*, 15(1), 29-45, 1976.
- [4] Rasmussen, C. A. & Brems, C., "The Relationship of Death Anxiety with Age and Psychosocial Maturity", *The Journal of Psychology*, 130(2), 141-144, 1996.
- [5] 渡部美穂子「自己の死と近い他者の死への態度」, 日本社会心理学会第39回大会発表論集, 260-261, 1998.
- [6] 金児暁嗣・渡部美穂子「宗教観と死への態度」, 大阪市立大学文学部紀要『人文研究』, 54, 85-109, 2003.
- [7] Neimeyer, R. A., Moore, M. K., & Bagley, K., "A preliminary factor structure for the Threat Index", *Death Studies*, 12, 217-225, 1988.
- [8] Thorson, J. A., & Powell, F. C., *Death Anxiety in Younger and Old Adults*. In Tomer, A. (Ed.) *Death Attitudes and the Older Adult*. New York, 123-136, 2000.
- [9] Gesser, G., Wong, P. T. P., & Reker, G. T., "Death attitudes across the life-span: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP)", *Omega*, 18, 109-124, 1987.
- [10] Spilka, B., Minton, B. and Sizemore, D., "Death and Personal Faith: A Psychometric Investigation", *Journal for the Study of Religion*, 16(2), 169-178, 1977.
- [11] 河野由美「大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究」, 『飯田女子短期大学紀要』, 第17集, 73-88, 2000.
- [12] 河野由美「インド・ネパール・日本の看護婦と看護学生の死観、来世信仰、死の不安についての比較文化的研究」, 『ヒューマン・ケア研究』, 第2号, 47-59, 2001.
- [13] 金児暁嗣『日本人の宗教性』, 新曜社, 1997.
- [14] Fortner, B. V., Neimeyer, R. A. & Rybarczyk, B., *Correlates of Death Anxiety in Older Adults; A Comprehensive Review*, In Tomer, A. (Ed.) *Death Attitudes and The Older Adult*. New York, 95-108, 2000.

* 本稿は平成15年度に財団法人21世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所で実施した「ターミナルケアと家族についての調査研究報告書」をもとに執筆されたものである。